86. 古典芸能の鑑賞

5 月 19 日、地唄舞の鑑賞で千駄ヶ谷の国立能楽堂に妻と行った。妻が新聞のプレゼント欄を見て応募し、たまたま 7,000 円の「脇正面」の席が二つ当たったからだ。実際の能舞台を見るのは初めてで、約 600 席の座席が「正面」「中正面」「脇正面」に分かれているのも初めて知った。ほぼ満席で 9 割以上は女性の観客だった。

演目は、①「中ノ舞」、②義太夫「一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)」、③狂言「源平合戦断章」、④地唄「古道成寺」で、①～③は源平合戦に由来し、④は道成寺ものでともに有名な題目。この会は地唄舞の方の主催だ。地唄は上方を中心に行われた三味線音楽。地唄を伴う舞は座敷舞ともいわれ、独舞の扇子一本で杖や手燭、自然現象まで象徴的に表現し、旋回を中心にした優雅でゆったりとした動きと技巧的な扇捌きや跳躍を時折加味し、抑制された細やかな表現が特徴といわれる。

地唄舞があったのは②と④。出演者は地唄舞は一人だったが、鼓・笛・浄瑠璃・三絃・小舞・胡弓等は人間国宝を含む一流の奏者の方々で格調の高いものだった。

①は前座のようにも感じたが、一調一管で謡がなく、小鼓と笛による演奏。「中ノ舞」とはテンポが中間という意味らしい。題材は能「敦盛」からと案内書にあるが、明瞭な音の小鼓と、静寂を切り裂くような鋭い笛の音に魅了された。

②は一谷嫩軍記の「須磨浦組討之場」で、一の谷の合戦後の平家の若き武将平敦盛と源氏の武士熊谷次郎直実の有名な話が題材。義太夫は三味線を伴奏に太夫が語る浄瑠璃の一派で、演者は高齢のようだったが棋界の第一人者で且つ人間国宝。張りのある声だったが、私にとっては初めての義太夫の鑑賞で、内容は所々わかる程度だったのは残念だった。三味線奏者も人間国宝という豪華な顔ぶれ。舞は確かに旋回も多く優雅でゆっくりとした動きで、20 分強の熱演だった。

③の狂言「源平合戦断章」は、能「敦盛」の間語(あいがた)りと、能「景清」の小舞であった。この内容を語る能力はないが、「小舞」はその動きが堂に入っているのがわかるようなものだった。その筈で、この人も人間国宝の方だった。

④の地唄「古道成寺」は現存する“道成寺もの”の中では最も古いもので、元禄時代に京坂の三味線弾きの名手岸野次郎三の作曲といわれ、後にできた「新娘道成寺」などと区別するために「古道成寺」と名づけられたという。

道成寺ものは謡曲・浄瑠璃などの題材として有名。紀州道成寺に伝わる安珍清姫伝説であり、紀伊牟婁(むろ)の清姫が自宅に泊まった僧安珍に恋慕し、大蛇に化身して後を追い、道成寺の鐘の中に隠れた安珍を焼き殺す物語。

蛇足だが、私は尺八の中伝の免状を頂いた 25 歳頃、地唄箏曲の「新娘道成寺」を習っていた。当時の楽譜には昭和 46 年 3 月の記録が残っている。53 年前だ。箏曲の生田流では「新娘道成寺」、山田流では「鐘ヶ岬」というと先生から教えられたこともメモ書きしてあった。

その唄の出だしは、「鐘に恨みは数々御座る、初夜の鐘をつく時は諸行無常と響くなり･･･」というものであった。「古道成寺」の出だしはこれとは異なり、「昔昔此の所にまなご（真砂）の庄司というものあり。かの者一人の娘をもつ･･･」というものだった。

舞は正直よくわからなかったが（唄の「くるりくるり くるくるくるくるくるくる 追ひ廻り追ひ廻り」に合わせてか旋回しているように思えたのが間違いでなければよいのだが)、唄と三絃（男性)、それに胡弓（女性）の演奏は、特徴的な音階を思い出させ、音色と緩急自在のテンポは素晴らしく、強く印象に残り、30 分弱の大曲を堪能した。奏者のプロフィールを見ると大変活躍されている方々であることもわかった。

能楽堂での初めての古典芸能の鑑賞は、もっと勉強してから来れば良かったとの反省もあるが、能楽堂で食べた鰻重と餡蜜とともに印象深いものになった。翌日「新娘道成寺」の楽譜を取り出し、尺八を少し吹いてみたが、「手事」などは指が動かずがっかりした。

（2024 年 5 月 24 日）